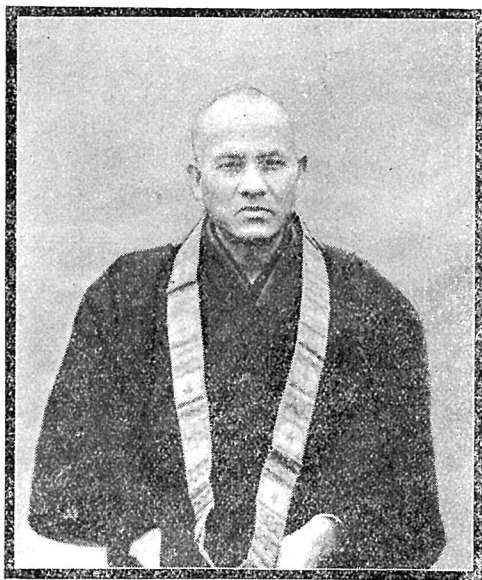


寺本・松原・横川教授を偲ぶ

寺本・松原・横川教授を偲ぶ



故寺本婉雅教授略歴

明治五年三月二十一日	滋賀縣蒲生郡鐘山村に生る。
同 二十八年九月	眞宗大學入學
同 三十一年六月	眞宗大學退學、西藏留學の途に上る。
同 三十二年十一月	西藏人の迫害に遭ひ西藏護衛兵を以て選送せらる。
同 三十三年八月	義和團事變に依り奏任通譯官を命ぜられ北京公使館 師團司令部に勤務す。
同 三十四年九月	小村外務大臣より西藏留學を命ぜらる。
同 三十四年十月	西藏拉萨市レブン大學に入學。
同 三十八年五月	西藏札什倫布市の大學に入學。
同 三十八年十月	印度經由歸朝。
同 三十九年四月	三度入藏して喇嘛教を研究す。
同 四十二年二月	歸國。
同 四十二年二月——至現在	眞宗大谷大學教授拜命。
同 四四年九月——至昭和二年三月	京都帝國大學文科大學西藏語講師を命ぜらる。
昭和十三年十二月——同十四年一月	滿洲國國務院興安局の招聘に應じ喇嘛教の實地調査、喇嘛教改革其他教育軍政上の具體案作製提出に當る。
昭和十五年十二月十八日	權僧正に補せらる。
同 年十二月十九日	入寂、法名、默行院釋婉雅、

故寺本婉雅先生と西藏學

九八

山口益

今でこそ東京京都及び東北の諸帝大並びに各宗立の諸大學に於て西藏語の講義の開設せられてないものはいやうであるが、二十七年以前の日本の學界に於て、西藏語が始めて學科目に加へられたのは、京都では大谷大學の前身眞宗大谷大學と京都帝大の文學部、即ち時の文科大學とであつた。そしてその兩大學に於ける西藏語の講義は、當時近江の鏡山と云ふ一在所にあつて、農村の青年と法義を談じつゝ、胸中、鬱勃たる日本佛教の大東亞的使命感を潜めて、農村の寺院にしばしの目を送られた、隠れたる學僧寺本婉雅先生によつて開講せられたのであつた。

東京の學界に於ても殆ど時を同ふして入藏沙門河口慧海師を中心に西藏語の講義が開かれたと記憶するが、自分が直接その雰圍氣に接せなかつた東京學界のことに就いては茲にそれに關説すべくもない。

少くとも京都に於ける西藏學は、寺本先生によつて大谷大學圖書館に藏せられた北京版西藏大藏經によつて培はれた。寺本先生後半世の御勞苦は、若い學徒にその老大な西藏語大藏經研究の關心を惹き起させることに費された。先生による西藏語

學に關する幾多の勞作もまたさうした意圖に於てものせられたと承つてゐる。その學問の性質上その量に於て多大であるとは言へないけれども、西藏語佛典の研究業績と云ふ點で京都の學界が一際光彩を放つて來たのは、京都の學徒が過早く寺本先生指導の下に、將又、少くとも寺本先生の恩恵の下、容易く北京版西藏大藏經に親近するの機會を有し得たからであり、その意味に於て寺本先生が日本に於ける西藏語學創設者としての位格は餘りにも高顯である。

西藏大藏經研究の扉は、まことにそのやうにして二十七年以前に寺本先生によつて開かれた。西藏大藏經には東洋學の諸部門に關して重要な資料の數々を包藏すると想はれるが、現今までに世界の學界に於てその内容の研究・調査が證明せられた部門は、何としても大小乗佛教の聖典であり、それが漢譯諸典とは別箇な價值を有つと云ふ點である。また固よりそれが西藏大藏經研究について目指さるべき本領でもあらう。それは先以て既に己に極めて高度の精神文化を築き上げてゐた支那の思想言語によつて消化せられ、それによつて翻し表はされた漢譯大藏經と、佛教を輸入する爲のみにやうやくにして構成せられたば

かりのチベタン・クラシックが、梵文原典の上に貼り付けらるゝやうにして直譯せられた、云はゞ梵語佛典の餘りにも直譯的な西藏譯大藏經と、その兩者が我々に與へる佛教解得の殊別性と云ふ點に於て標識せられる。そして佛教聖典が印度思想と云ふものに於て歴史的根源性を有する限り、その餘りにも直譯體な西藏語聖典が我々に與へるものは高度な原典性で感覺である。「西藏譯を讀めば梵語原典の形態が想い象られる」とは故荻原雲來博士のつねの言葉でもあつた。またそれ故に西藏語聖典は、云ふ迄もなく梵文原典校訂上不可缺の資料であり、古典としての印度佛教聖典は西藏譯聖典によつて今後益々その原典性が能く照顯し出さるゝことであらう。

それは、漢梵本にもその聖典の得らるゝ範圍についての所談であるが、更に、印度大乘佛教の思想的な二潮流としての中觀瑜伽に關する論釋や、因明學に關する諸典等、漢・梵の諸典に未藏未發見のものが底測りなく伏藏として有することに着眼する時、佛教學の將來性は我が西藏語大藏經の上に限り無く展開せられてあることを知るのである。

西藏學がミステイクな、時には怪奇な領域に屬するものゝ、如くすら考へられてゐた時代から、佛教學の正道に關することが證明せらるゝに至つた現在までの二十有餘年の間、西藏學の草昧期に際して、寺本先生は凡ゆる困難に堪えて能く西藏大藏經と云ふ伏藏開顯の大業に任ぜられた。寺本先生のその勞苦を想ひ、その功績を偲ぶ者は、先生によつて切り開かれ限り無く展べ開かれてゐる西藏學道の將來に向つて着々行歩するの他ない

寺本・松原・横川教授を偲ぶ

であらう。

著作論文目錄

西藏古代神話十萬白龍	明治三十九年
于闐國史	大正十年
西藏語文法	大正十一年十月十五日
西藏文唯識論	大正十二年二月三日
世親造唯識論	大正十五年三月十五日
新龍樹傳の研究	昭和三年五月十八日
ナータ 印度佛教史	昭和三年五月二十七日
藏漢和佛說無量壽經	昭和八年五月十日
藏梵合璧 佛說阿彌陀經	昭和十年一月二十五日
根本佛教 行の中道實踐哲學	昭和十年五月十日
緣起觀 異部宗輪論	昭和十一年十二月三十日
對校 異部宗輪論	昭和十二年五月十日
西藏文阿毘達磨俱舍論	昭和十三年五月二十日
梵漢獨對校 龍樹造中論無畏院	
西藏文和譯 龍樹造中論無畏院	
實用 西藏語文典	

其の他「皇道と佛道」「生命の原理日本哲學」「求道と女性」「愛兒はいづこへ」等、他に雜誌論文等あり。



故松原恭讓教授略歴

一〇〇

明治 元年十二月十三日

福井縣南條郡北仙山村に生

る。山口半右衛門氏の舍弟。

明治廿二、三年頃(?)

兵庫縣神崎郡中馬村恒屋

祐光寺に入寺。

同 三十年七月

眞宗大學専門本科宗餘乗選科

卒業。

同 年九月より

大谷派本願寺の命により奈良

至同三十五年八月

東大寺勸學院に於いて華嚴、

同 三十五年九月

三論、天台、眞言等を研究す。

同 三十七年七月

高倉大學寮に於て眞宗學專

同 三十七年九月

攻。

同 三十八年二月より

學師を授與さる。

至同四十四年九月

高倉學寮職員として勤務。

大正 四年十二月

擬講の稱號を授與さる。

同 九年夏

内典補習會教師となる。

同 九年夏

華嚴宗勸學院講師として奈良

同 九年夏

東大寺に出張、夏秋雨期毎に

至同四十四年九月

華嚴の經論章疏を講ず。

昭和 二年夏

安居次講を命ぜられ華嚴奥旨

同 三年十一月

妄盡還源觀を講ず。

同 六年五月一日

嗣講の稱號を授與せらる。

同 十五年九月八日

大谷大學教授拜命。

同 十五年九月八日

示寂。法名 靜觀院釋恭讓。

松原先生のことゝも

河野雲集

松原先生が大腸疾患で御静養旬日を出でずして急逝された由を知つたのは、やがて新學期も初る九月九日朝であつた。當時、私の職場では夏の休暇を徹して或る圖書の整理を急いでゐた。酷暑の中、連日の執務は樂ではなかつた。その仕事が將に了らんとする時、私は先生の訃を聞いたのである。私は何も考へる力がなかつた。もうどうしても先生にお會ひ出来ないのだとは思へなかつた。先生御不快のことを全く知らなかつたので先生の訃を知つても實感を伴はなかつたのである。それは既に半年を経る今日に於ても同じである。先生は未だ御存命で毎週火曜日には奈良から御出京になるやうな氣がしてならない。

先生は若くして奈良に學ばれ、後東大寺戒壇院講師として華嚴經を恒説せられた。本學への來任は昭和六年である。一體、大谷派からは幾多の華嚴學者を輩出してゐるが、東大寺正系の華嚴教學を傳へてゐられたこと、先生を以つてその第一人者とする。東大寺が先生を遇すること厚かつた所以である。

先生の御名前には恐らく「論語」學而篇の「夫子溫良恭讓、以得之仁に由來するものと思ふ。先生の御性格を端的に顯はしてゐること、此の一句に及ぶべきものはない。まことに法に對し

寺本・松原・横川教授を偲ぶ

て莊敬、人に向つて謙遜なること先生の如きは無かつた。先輩學僧の章疏の、異轍の造に非ざる限り、必ず敬してその宜しきを挙げ批判の冷酷を加へられることは少なかつた。後輩學生に對してもその僅かの美點すらこれを認めて賞せられ、至らざるを數へられること殆んど稀であつた。講壇に立たれる前に學生に向つてされる會釋の鄭重なること、恰も先輩に對するが如くであつた。春の新學年など新入生はその勝手違ひなのに驚き、中には先生の御態度を可笑しがする不心得者もあつたが、やがては起立して憤み深く迎えるようになった。夏の休暇に、私共の差上げる屑々たる御見舞や賀狀にも必ず御返信を賜つた。休暇を利用して讀んでゐる書物のことなど申上げると、その書の持つ性格、華嚴教學に於ける位置、注意して讀むべき箇所、信賴するに足る末疏註釋など、お尋ねしなくても必ず教へて頂けるのである。私はかゝる手紙の二三を大切に保存してゐる。先生の講義は懇切且熱心であつた。所謂、「讀み癖」を嚴重に守つて、その異例ある場合は必ずこれを註せられる。何度も念を入れて繰返される釋義は短氣な若年輩を惑はすこともあつたが、ノートの文章は極めて簡潔明快であつた。蓋し漢學の御造詣の深か

つたためである。熱中の餘りよく案を叩いて「決釋」を語つて所定の時間を経るも意に介せられなかつた。講義中、異轍を評されるや最も峻烈であつた。鳳潭に對する如き一蓮院の講録等に見ゆるに數倍した。それは先生が一方東大寺華嚴の正系を傳へられたためと、他方研學に御熱心であつたからである。私共の答案や論文に對してもその御批評と御指導とは微に入り、細を極めた。總じて初めにお賞めの御言葉頂くのである。それから私共は縷々として盡きざる御批判を承はるることになるのである。誤字は丁寧に訂正せられ、思索の至らざるは必ず指摘せられた。如何なる短文小篇なりと雖もその故を以つて輕んぜられることは無かつた。

先生は一蓮院秀存と伏明とがお好きであつたやうである。三河佐々木上宮寺に祕藏する一蓮院の白華本を長年月を費して筆寫珍重してゐられた。殊にその「讀華嚴旨論」のお話は何度も拜聴したことを覚えてゐる。それは一蓮院が「華嚴旨論」を讀んで自ら成つた語彙集と簡單な註釋とを兼ねたノートの類であつたが、餘り廣く讀まれないこの書に對して一蓮院の注いだ不撓の努力が先生を動かしたのであらう。伏明のことはよく講義に引用された。講義が伏明のことに及ぶや必ず歎賞の言葉であつた。時にはボードに彼の用ひた分科などを記して「隨喜の餘りこれを述べるのであります」などと仰せられる。

先生の華嚴章疏の蒐集の多く且秀れたるは全くその例が無いと云つてよい。「探玄記」など刊行年代を異にし、書入を異にするもの三・四種を算へ、「五教章」も七種以上をお持ちのやうで

あつた。御自坊播磨祐光寺の庫裏の二階にはその全部が整然と列んでゐる。先頃私は同寺に參詣する機を得て、その寺寶として永く同寺に藏せられる由を承つた。先生の舊藏書の中には學界未見のもの、數多く存するは言ふまでもない。私はこの藏書に目錄が作製せられ、解説が附せられ完全な文庫となつて永く散逸のおそれ無きを期したい。恩寵を蒙りし門弟の一人として私は先生の法寶を護持したいのである。

(昭和一六・二・一五記)

松原先生著述目録

- 現存支那五祖撰述華嚴部章疏目錄 (謄寫本)
- 現存支那五祖以外撰述華嚴部章疏目錄 (謄寫本)
- 一蓮院秀存華嚴探玄記講義(校訂) 昭和三年 東方書院
- 華嚴宗講說(日本宗教講座ノ内) 昭和八年 法文館
- 二種深信講義 昭和十年 丁子屋
- 眞宗の信念と妙好人逸話 昭和十一年 大正五年
- 經歴上人の墓碑 無盡燈第二一卷一〇號
- 華嚴宗より見たる華嚴經 日本佛教學協會年報
- 二種深信考 宗學研究目第一號至第十號 自昭和五年至同十年
- 法話その他 昭和八年度

歡喜(一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)

一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、等

其の他佛書解説大辭典に華嚴宗章疏に關する解説數項目あり。

寺本・松原・横川教授を偲ぶ



故横川顯正教授略歴

明治三十七年一月二十七日

大分縣南海部郡川原木村大字

横川に生る。

昭和三年三月

大谷大學卒業。

同六年三月

大谷大學研究科修了。

同八年四月

學部教授囑託。

同十五年四月

専門部教授。

同年五月

學部教授。

同年五月二十九日

永逝。法名 能了院釋顯正。

横川君を憶ふ

福井元澄

微笑すると消えてなくなるやうな細い目、叡智を現はす廣い額、くせのある長髪、整つた面長など、こが故芥川氏に似た特異の風采、老成した藝術家を思はせるやうな年の割合になんとかくしつとりと落ちついた容姿、それ等の一つ一つが今横川君を憶ふ時、彼の涙みつくせぬ深き友情と共に、生前にもまして生き生きとなつかしく浮び上つて来る。

彼は幼にして生母に別れ、主に祖母の手によつて、一人の兄弟もない孤獨と寂寥の中に育つた。學生時代はかなりひどい貧苦と闘はねばならなかつたが、卒業後も尙この苦惱は去らず、その中にあつて宗教學に獨自の境地を切り開きつゝ、歩んで來た彼の道は、光輝に満ちたものとは云へ決つて容易なものではなく、むしろ或る時代には荊棘のそれであつたとも云へやう。然しながら如何なる窮迫も憂愁も彼を疲勞困憊せしむる事は出來なかつた。私は今ジャック・ロンドンのホワイトフアングを思ひ出すには居られない。彼の孤獨と寂寥は、彼に暗い陰翳を與へる事の代りに、思を内に深め思索を豊にすると共に、窮迫と苦闘は、彼を卑屈怯懦たらしめずして却つて彼に剛毅不屈鐵の如き意志と火の如き情熱とを與へた。かうした性格のはげし

い一面は、時々どうかすると閃き出るチカリとさすやうな彼の鋭い眼光や、沈黙寡言それでゐて何となく人を壓するやうな態度に現はれ、それが學生時代には、一見人に近寄り難い感じを與へたやうである。然しかうした一面は後年高き教養と理性とに包まれて獨自の圓滿な人格を完成した。こゝに至るには彼の學問に於ける場合と同様に、その師鈴木大拙教授の偉大な影響があつた事は否めない。彼の師に對する尊敬と追慕とは到底こゝに云ひ盡せぬものがある。その師の傳記を彼は二年程以前から某書肆の依頼を受けて草して居たが、この仕事は恐らく彼の本懐とするところであつたらう。毎週火曜日を定めて、熱心に執筆してゐた。これは殆んど出來上つてゐたが、惜しむらくは學問論の一部が尙未筆に終つてゐる。即ち完成までに彼の死が二ヶ月早かつたのである。これも朱玉を逸した思ひに胸の疼く事の一つである。

彼の内に包まれた情熱は、外に向けられる事の代りに、ひたむきに學問に向けられた。よく讀みよく思索し而も天稟とも云ふべき語學力と透徹せる理解力との故に、その讀書力には實に驚嘆すべきものがあつた。時流を求めず、世俗的な名譽や物

質に超然として學問に没入し、それ自體を楽しみ、孜孜として倦む事を知らなかつた。(彼の學問論に就いては又他日語らるべき機會があらうが) 宗教學に於ける彼の研究の歩みは大體三期に分たれやう。第一期は歐米文獻の涉獵檢討の時代とも云ふべく、第二期は禪を中心として廣く佛教を探り轉じて眞宗に踏み入つてゐる。この時代は専らその師鈴木大拙教授の追従時代と云ふ事が出來やう。第三期は第一期第二期の研鑽を基礎として漸く彼の思想が圓熟獨自の體系を樹立せん事に專注した時代で、その著述の構想に就いて熱心に語つてゐたが、こゝに一步踏み込みながらその大著成らず、僅かに講義の宗教型態論をその一部を示すものとして残したまふ、突然仆れた事はかへすゝも限りなき痛恨事である。彼は又キリスト教を主とする從來の宗教學にあきたらず、佛教に重きをおく宗教學を企圖した。この考はかなり永い間彼の胸に抱かれ育まれてゐたが、最近愈々その構想成り、その完成を急いで、筆を執つてゐたが遂にこれも絶筆となつてしまつた。

最近彼の思想は愈々圓熟し、書かんとする意欲の動くまゝに、しきりに筆を執つてゐた。體に對する自覺も持ち病氣の不安も感じないわけではなかつたらうが、研究に對するひたむきな熱意と學的抱負實現の希望と教授としての責任感との故に、彼の鐵の如き意志は一すじに彼に努力の道を辿らしめ、遂に悲痛なる結果へと急がしめたのである。彼の如き逸材の夭折によつて大學の興へられた損害はまことに償ひ難きものがあると云はねばならぬ。幸に彼の藏書はすべて大學に寄贈された。今は

寺本・松原・横川教授を偲ぶ

たゞ學の爲に第二の横川君の出づる事を祈つて止まぬ。それこそ眞に亡き彼を生かすものと固く信ずるのである。

著作論文目錄

昭和三年七月	金子大榮氏「代受苦」を英譯す。The Buddhist Doctrine of Vicarious Suffering (The Eastern Buddhist)
同 六年三月	荷澤神會の無念禪(大谷學報)
同 十一月	宗教的神祕主義の基本的概念(大谷學報)
同 七年一月	神祕經驗と信仰意識(大谷學報)
同 八年七月	宗教運動の神祕的基礎(大谷學報)
同 九月	宗教經驗に於ける心理的流動性(和雅音)
同 九月	鈴木ビートルス教授の信誼會館に於ける講演を翻譯す。「佛教と實際生活」として出版さる。
同 九年五月	鈴木大拙著「禪論」第二第三輯を看て(大谷學報)
同 七月	菩薩の住處とは(アソカ)
同 十年一月	鈴木大拙著 The Training of the Zen Buddhist Monk を翻譯す。「禪堂の修行と生活」として出版さる。
同 十一年十一月	孤獨宗教(和雅音)
同 十二年三月	宗教の活くところ(求眞)
同 四月	鈴木大拙著 Essays in Zen Buddhism 第

大谷學報 第二十二卷 第一號

同	七月	二卷の一部を翻譯す。「禪と念佛の心理學的基礎」として出版さる。
同	九月	神祕神學の中心問題(大谷學報)
同	十二月	信心と悟——見と聞(求真)
同	十四年七月	風に吹かれて(大谷月報)
同	九月	Shin Buddhism as the Religion of Hearing (The Eastern Buddhist)
同	十月	禪の「見」的性格(禪)
同	十月	近代フランス神祕家の特異點——マルタンの還來的豫言に就いて(大谷學報)
同	十月	鈴木ビートルス先生を憶ふ(大谷月報)
同	十二月	宗教經驗の淨土教的型態(支那佛教史學)
同	十五年一月	故ビートルス教授の遺稿集「青蓮」の一部を翻譯。
同	一月	死と佛教(法藏)
同	五月	貧人の骨(曉鐘)